

INFORMATION

「東北一神さまたちとの復興展 in 長野展」 ～人形たちと歩いた、有り難き毎日～

東北大震災で被災したイフンケ（小松剛也さん）を応援するために、9月にチーム・コヤーラ主催で始まった「東北一神さまたちとの復興展」は、3月に長野県小諸市の「読書の森」で開催される。被災から一年。復興への思いを胸にイフンケが「有り難き連鎖が続いていくように」と同展を企画。イフンケの新作（写真）を含め、チーム・コヤーラで同展に関わった人々も展示に参加。

会期：3月3日（土）～3月25日（日）
10am～6:30pm

会場：茶房 読書の森

住所・連絡先：
長野県小諸市大字山浦 5179-1
tel 0267-25-6393
email kp2y-yd@asahi-net.or.jp



第3回人形演劇祭 "inochi"

日本の人形演劇の世界に、風を呼び込み続ける黒谷都や玉木暢子。彼女たちが東京・調布市のせんがわ劇場を舞台に活躍する「人形演劇祭 "inochi"」が、今年で第3回を迎える。どれも一度は見ておきたい舞台やパフォーマンス。

3月15日（木）～3月23日（金）

【劇場公演】

genre:Gray 利己的物体と奉仕的肉体によるグロテスク unco happy!

「モノ語り◇水仙月の四日」（写真）

かわせみ座「精靈幻想」

百鬼ゆめひな「雛がたり」

【ホワイエパフォーマンス】

JIROX DOLLS SHOW

この他、オープニングイベント、ストリートパフォーマンス、オブジェ展などの企画が盛り沢山！

チケットは、劇場窓口・電話・劇場HPでお求めいただけます。

◎せんがわ劇場チケットサービス

劇場窓口・電話（9:00～19:00）
※休館日：第3月曜日

劇場 HP <http://www.sengawa-gekijo.jp/>



会場・問 TEL：03-3300-0611

調布市せんがわ劇場

企画：玉木暢子・黒谷都・松井憲太郎

主催：調布市

実施：調布市せんがわ劇場フェスティバル事業実行委員会

後援：日本ウニマ（国際人形劇連盟日本センター）／公益財団法人現代人形劇センター

第3回世界創作人形展

海外の創作人形と日本の創作人形がスパークする世界創作人形展。今年の海外の作家は、ロシアを中心に20名の作家が出品予定！今はサンフランシスコでモデルとして新しい挑戦をしているパシャ・セトロヴア、ヨーロッパのアートフェアに繰り出したポポヴァー姉妹らの新作、ウラル人形作家協会のエレナ・リシナの推薦による布人形のユニークなタッチの作家たちの人形など、見逃せない。来日予定作家：エレナ・リシナ、ナタリ・グレンスチコヴァ、ボリス・ポボヴ（アンナ・オルロフスカヤ=写真、夫が代理で来日）（以上ロシア）、アーリン／フィッシュ・ナヴァロ（アメリカ）、ヴィタリス・セプカウスカス（リトアニア）。日本からは、様々な素材や表現に携わるベテランから新人まで25名が出品。

4月4日（水）～4月10日（火）

午前9時～午後9時

（最終日は午後4時で終了）

入場料 無料

会場：丸の内オアゾ

丸善本店4F ギャラリー

東京都千代田区丸の内1-6-4

企画 HAZEKI OFFICE

問 TEL：03-6780-0338（ドルスバラード）



Anna Orlovskaia

「東北一神さまたちとの復興展」への寄付金明細

昨年の東北大震災以降、海外などからチーム・コヤーラや羽間オフィスに義援金として寄せられた義援金は、イフンケ（小松剛也さん）の希望に沿って復興をテーマとする展覧会開催費用にあてさせて頂きました。ここにその収支のご報告をいたします。

ご支援頂きました皆様、どうもありがとうございました。

・収入

国内 41,000円
海外 105,492円

収入計 146,492円

・支出

作品材料費 10,385円

展示運営費 140,135円

（展示運営費：会場費、宣伝物印刷費、旅費、ゲスト謝礼、消耗品費など）

・支出計 150,520円

差額 4028円は羽間オフィスが補填

コヤーラ・クラブ入会条件

入会金なし 年会費：2000円（更新時に2年分一括払いの方は3900円となります。）
年4回（3・6・9・12月）のチーム・コヤーラのニュースレターとDM便が届きます。

お申し込み方法

年会費 2000円を以下の方法でご送金ください。

【郵便振替】 通信欄に「コヤーラ入会」とお書きください。

送金先 「口座番号：00140-7-358370 「口座名」 チーム・コヤーラ

*ご入金が確認できたらチーム・コヤーラよりハガキで受領証と会員証を兼ねたお知らせをお送りし、次の号から「コヤーラ通信」をお送りします。更新時には、有効期限内の最後の号を発行するときに、更新のお知らせを同封いたします。

DM同封希望の方（発行月から3ヶ月の間に展覧会を予定されている方）

事前に枚数などお問い合わせの上お申し込みください。同封DMは発行月の前月20日にチーム・コヤーラ必着でお送りください。

同封料金 コヤーラ・クラブ会員：2000円 一般（非会員）：3000円

紙上展応募の方

会員の方の人物の自作品の写真を受け付けております。

9号〆切 2012年5月10日（必着）

以下を下記まで、郵送かメールでお送りください。

作品写真2～3点（全体・アップ・裸形） サイズ：ハガキ。

「会員番号」「作家名」「タイトル」「素材」「サイズ」他、簡単なコメントなど。

*何点でも応募できますが、誌面の都合上掲載はお一人1点になります。

*応募作品はウェブ上で公開されることもあります。（講評は紙面のみ掲載）

*応募書類は返却いたしません。

個人情報について

頂いた個人情報はチーム・コヤーラの業務委託を受けるHAZEKI officeが厳重に管理します。名簿はチーム・コヤーラのニュースレター発送に使用させていただく他、チーム・コヤーラの趣旨に沿ってDMクラブ会員にとって有意義と判断した情報を伝達する以外には一切使用せず、チーム・コヤーラ以外の第三者が閲覧、使用することは一切ありません。

各お申し込み・連絡先

チーム・コヤーラ 東京都東村山市久米川町3-27-57 HAZEKI office内

TEL 042-395-7547（担当 ハゼキ）

FAX 042-395-7975

URL <http://www.ab.aunone-net.jp/~koyaala/>

Email team_koyaala@yahoo.co.jp

KOYALA通信 編集責任者 羽間チエコ（HAZEKI office）

©KOYALA TSUSHIN 2010, printed in Japan 本紙記載の記事・写真の無断使用・転載を禁じます。



KOYALA 通信

No.9

Mar. 1
2012



コヤーラ・フェス3を9月に開催！T.コヤーラ賞公募！

（会場は東京都渋谷区、会期は搬出入を含め1週間を予定。詳細は3月末頃、チーム・コヤーラのウェブサイトで発表します。）

コヤーラ・フェスは、第1回、第2回ともに高円寺の「自由帳ギャラリー」でコヤーラ・クラブ会員の方の作品を展示いたしました。今回はコヤーラ・クラブ会員・非会員をとわずに、プロ・アマ、誰でも応募できます。

一人1作品、優秀作品を審査して、世界に送り出します。わたしたちの手で、人形コンテストを開催しましょう！

【応募～出品までの流れ】

1 第1次写真審査 応募書類〆切 2012年6月30日（必着）

2 第1次審査結果通知 7月11日に、本人宛に封書で発送（第1次審査通過した方へは、搬入の案内をお送りします。）

3 実物審査（作品搬入日）

4 審査発表

【審査】 ゲスト審査員に四谷シモン氏をむかえ、羽間チエコ、チーム・コヤーラ、各賞関係者で行います。

【賞】

1 チーム・コヤーラ賞 奨金1万円と賞状 10月にロシア・モスクワで開催される「ART OF THE DOLLS」展に、主催者特別枠でチーム・コヤーラが出演します。

2 Art of the Dolls 賞 奨金1万円と賞状 10月にロシア・モスクワで開催される「ART OF THE DOLLS」展に、主催者特別枠でチーム・コヤーラが出演します。

3 ウラル人形作家協会賞 奨金1万円と賞状 12月にロシア・エカテリンブルグで開催される「DOLL FESTIVAL」展に、主催者特別枠でチーム・コヤーラが出演します。

4 コヤーラ・フェス賞（会場の一般投票により、最終日に発表） 賞状

※海外出展については、いずれも受賞者が出品に合意した場合

【出品料】 会員 5000円 一般 8000円 一人一点のみ（組作品の場合は、人形体数2点まで）

【受賞発表】

1, 2, 3は展示初日に発表。4は展示最終日に会場の投票を集計し、チーム・コヤーラのウェブサイトとコヤーラ通信にて発表します。

【応募方法】

・下記応募書類を、6月30日必着でチーム・コヤーラ事務局まで「ご本名」でお送りください。

・応募料（会員 5000円、一般 8000円）をチーム・コヤーラの郵便振替口座までご送金ください（6月30日消印有効）。

送金人名は「ご本名」でお願いいたします。

ご注意！ 応募管理は、すべてご本名で行います。作家名をお使いの方は、応募書類関連はご本名での統一をお願いいたします。（作品展示の際は、作家名使用可）

【応募書類宛先】

チーム・コヤーラ事務局

〒189-0003 東京都東村山市久米川町3-27-57 HAZEKI OFFICE 内

問い合わせ TEL 042-395-7547 email team_koyaala@yahoo.co.jp

【応募料送金先】

郵便振替の方

「口座番号」 00140-7-358370 「口座名」 チーム・コヤーラ

※通信欄に「コヤーラフェス3」とお書きください。

銀行送金の方

ゆうちょ銀行 〇一九（ゼロイチキュウ）支店

当座預金 「口座番号」 0358370 「口座名」 チーム・コヤーラ

※送金人名の前に「fes」と入れてください。

【応募書類・資料】

・作品写真：3点 写真サイズ：各2Lサイズ、またはA5サイズ程度

正面全体・好きな角度からのアップ・衣装のある人形はヌード全体（衣装一体型の作品は不要）

※できるだけ無背景、装飾や照明の演出をしてお願いします。

※データでの出品は不可

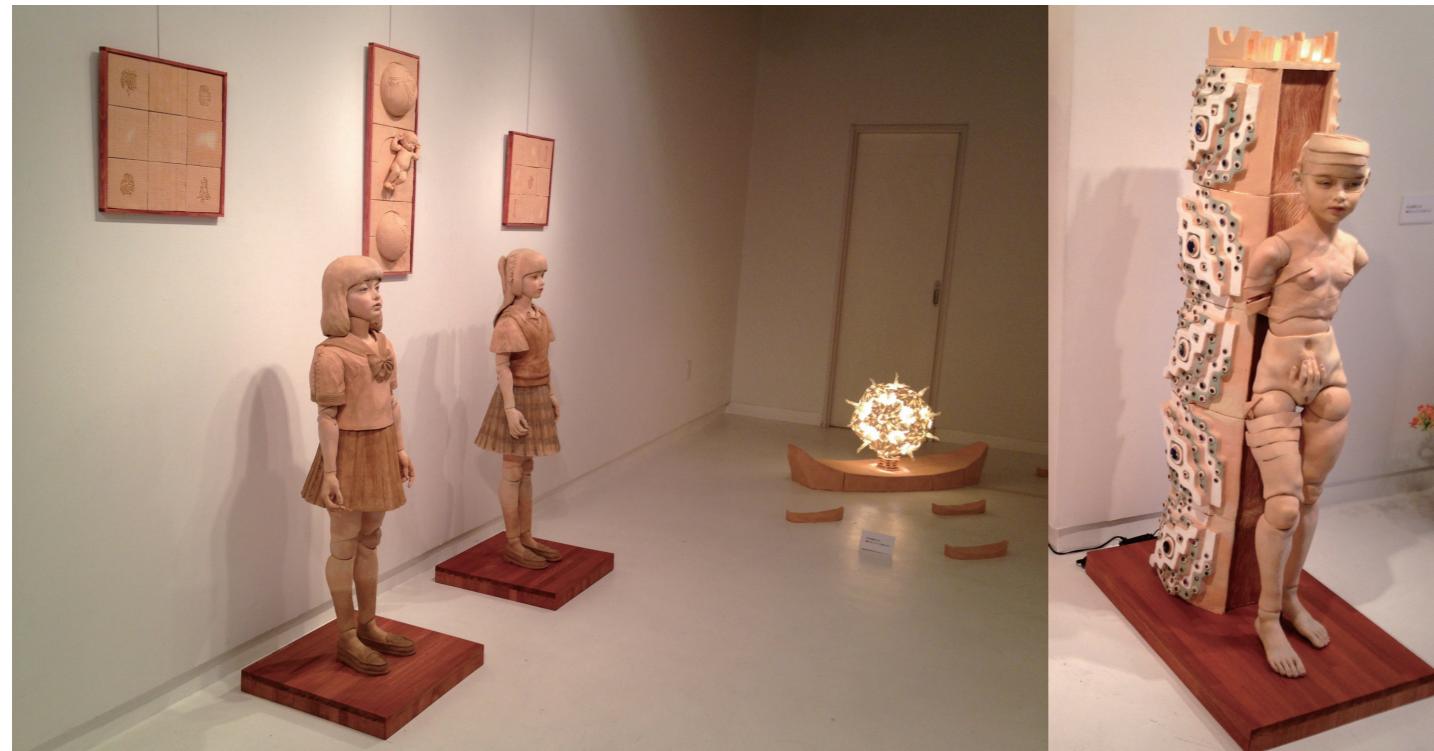
・応募書類 A4用紙に、以下の内容を明記



月光社人形展 "the concept of yong"

2012年12月9日～20日
マキイマサルファインアーツ（東京都台東区）

リポート 羽関チエコ



昨年秋、月光社のつじとしゆきさんから《DFJ》を読んでいるときから、人形でありながら、人形を越える表現を考えてきた。その答えをこの個展で表す》というようなメッセージが届いたとき、首のない人形のオレンジ色のボディ、眼球のようなものがたくさん埋め込まれたオブジェの案内状の写真を見て、人形でシュールアリストイックな表現を模索するのだろうか、と思った。

しかし実際に会場に行って見たものは、砂漠を思わせるテラコッタの色彩の世界だった。砂漠、遺跡、化石、というイメージが浮かんでくる。

あのオレンジ色のオブジェらしきものもテラコッタ色であり、得意のビスクドールも見あたらない。

ビスクからテラコッタに大きく舵をとった月光社の思惑を知るヒントは、展示タイトルの 'the concept of yong' にあるようだ。yong とは中国の遺跡にある俑のことである。日本の埴輪のルーツともいわれる俑は、死者の臣下や衛兵などを象り、ともに墓に埋葬された。

月光社の会場の中央には、テラコッタで作られた美少女の球体関節人形「otome」が2体、屹立している。ビスクより重量のあるボディであるにもかかわらず、スタンドもなく自立している。ロリータ好みの学生服の美少女人形が、何千年もの時を隔てて廃墟から発掘されたら、こんな感じなのだろうか。

漫画やアニメのサブカルチャーにも造詣が深い月光社にとって、ロリータのイメージは作品の上でよく扱われる。現代の人形社会を考えるときに、それは重要なテーマとなる。思えば、月光社が今まで見せてきた実験的な作品は、対象となる人形を使って欲望を相対化し、解体する試みだったとも思える。今回は、解体ではなく「風化」という要素を持ち込んだとみるべきか。

他には、月光社メンバーの門松博久さんによる、あの目玉だらけの「hashira」という作品に、ミイラを思わせる倒錯的なイメージのボディや、倒立した球体関節のボディが絡むシリーズや、照明を組み込んだオブジェやレリーフなども展示されていた。

あらためて、文頭の問い合わせに立ち戻って見直してみる。人形の定義の試みは様々に行われてきているが、人形は人類誕生の歴史とともに生まれた概念的な存在であり、紹介する美術館や雑誌のような「入れ物」や「枠」ができるまで、定義は不要だったはずだ。人形を作っていると思う人が作るものは、どんな形や素材であっても人形なのだが、できあがったものが、人形以外の何ものかとして引き上げたり、解釈されることはある。それはすべて他者の言葉によるものだ。

人形は人形だと言って構えていれば良いと思うが、人形の地平の向こうに美術を見て、そこでの評価を得ようとする動きも確かに根強い。たとえばアメリカの NIADA の会員達は、美術な評価を獲得しよう、が合い言葉だったし、日本人の形芸運動も、美術展の芸部門に「入れてもらう」ことが目標だった。人形は、他分野の語彙を必要しないと存在できないほど、頼りないものなのだろうか。人形を越える表現とは、借り物の語彙に頼らず、そこに人形として自立すべきものを目指すべきだと思う。

この会場で人形師のつじさんは、学生服の少女の作品をはっきり「人形です」と言った。つじさんは、人形の地平の向こうに、人形を見据えている人ではないだろうか。会場の周囲に日本人形店が林立する浅草橋という土地柄も、偶然とはいえ、月光社の「人形」を鑑賞する環境として面白かった。



第2回いばらき現代人形作家 100人展

2012年1月19日～24日
水戸市 茨城県立県民文化センター

リポート 矢部藤子（茨城県在住）



茨城県在住の人形の作り手115人による同展は、昨年3月の開催を前に大震災が起り、被災した会場は使用不能、その後の日常生活も展覧会どころではない混乱が続き、もはや開催は不可能と思われていた。しかし主催者の熱意と周りの支援、そして奇跡的に会場が早く復旧したことにより、一年を経て今回の開催が実現した。

どんな状況下にあっても、作ることによって気持ちが救われたと語る出品者の声、そしてこの展覧会の開催が復興のひとつの象徴を感じる来場者、しかしまだ尾を引き続ける多くの問題と街のそこここに残る震災の爪痕、その現実やそれぞれの思いが混然一体となって、会場を密度の濃い空気で満たしているようだった。作品の倒壊・破損の被害も多かったと聞くが、115人の出品者による約300点の作品はまさに壯觀で、その数以上の迫力を感じさせる。入場者数はおよそ3千をかぞえたという。

戸田和子を会長とする実行委員8人はそれぞれ人形教室も主宰する作家で、出品者のなかにはその門下生も多く含まれる。だが、8人が八様に技法作風ともにバラエティに富んでいるため、教室展的なイメージはなく、出品者ひとりひとりの作り手としての高い意識と客觀性、自らの作品を「見せる」という意思をしっかり感じさせる質の高い展覧会に仕上がっている。

大きな茅葺の家屋を背景にした大山和子の「秋のみのり」（写真）の組み人形は、あたかも実際の農村風景に入り込んでしまったような錯覚を覚えるリアルさで、来場者を楽しませた。また、陶芸家が多く住む土地柄のため、陶による人形作品が多数見られるのもこの展覧会の特徴であろう。「人形」というくくりの展覧会においては、その質感や表現の自由さは新鮮に映る。中でも、陶土による球体関節人形の身体パーツをすべてバラバラにはずし、それぞれの形に合わせて作った器に収めるという、陶芸家の本領発揮とも言える手法で見せた森収吾の作品「あえぐ」（写真）は特に目をひいた。震災の際一部破損したが、破損にさえ独特の美を見る氣がするのは、陶ならではかもしれない。

壁面を埋めるため、主催者の提案で各出品者1人1点「面（マスク）」を競作した。人形作品とは違った各自のアイディアとセンスが盛り込まれ、見る人にも作り手にとっても新鮮で楽しい試みであった。（敬称略）



右上が筆者制作のマスク。
昨年のコヤーラ通信6号の
記事で紹介した作品。

